

昭和50年(1975) 10月12日

第21回NHK網走北見間駅伝競争大会 実況中継

……常呂高校チーム活躍……

\*このときの参加チームは、一般31チーム、高校5チームで、常呂高校は初出場でした。  
7区間を(注…7人プラス補欠2人のチーム)走り、2位という輝かしい成績を収めました。  
\*実況中継の文を記した河村先生が文中「…この第2位は、彼らにとって優勝に値するものに違いなし。各区間を自己最高の記録で走破した常呂高チームの各選手の素晴らしい健闘とチームワークは校史に残る記念すべきもの…伝統ある大会に…9人の選手すら編成できない学校は多い…初出場という経験不足の中で勝つことは至難の業…。記録から見ても4位に入れば十分…3位入賞ができれば大健闘…見事と言うほかない。(注…優勝した湧別高校とは) わずか1秒という差は優勝の可能性の証拠…。」と選手を讃えています。

\*文は、常呂高校の年誌「オコック」16号 (昭和51年3月発行) から転載

## 第21回NHK網走北見間駅伝競争大会

### 実況記録

——常呂高校チーム活躍——

昭和五十年十月十二日

十月十二日正午、網走市役所前、時報と同時に号砲一発。第21回網走北見間駅伝競争参加の一般31チーム、高校5チームの第一区走者は一斉のスタート。晴間のみえるまですずのコンディション。常呂高チームの大室は作戦どおりに積極的にダッシュ。初参加のためスタート順位が後方列にあつてやや不利な位置を走らせられている。ここをどう切り抜けて上位集団の中に安定した位置を確保するかが勝敗を左右する重要な第一ポイントと思われる。網走駅前にかかる頃には第13位くらいで第二集団グループの前方についている。スタート前の大室はアツプ十分であつたが、太股の筋肉痛をやや気にしていた。九日の強歩大会、十日のアルバイトがやや疲労となつている様子。しかし、このところめきめき記録を更新、試合強いところをみせているのであるいは好記録が期待されるかもしれない。十月四日の試走タイムでは10.9 Kmのこの区間を37'27"。調子によつては36分台の記録が可能である。大室の入っている第二集団には強敵、柏陽高の桐沢がいる。全道高校五十年第一位、全国大会出場のキヤリアを誇る俊足の彼は洗練されたフォームで快調にとばしている。大室はこの桐沢選手をマークしどこまでついていくかが課題となる。3 Km地点、網走湖荘

# オコック

'76 No16



常呂高等学校生徒会オコック局

付近では大室が桐沢をややリードする場面も見られたが、その後桐沢のスパイトがはじまり大室以下を大きく離して先頭グループへ入りまたたく間に網走市役所チームと並んでいる旭川走友会チームの後、第三位に喰いこむ健闘ぶりである。大室は後半、前後の集団から離れて孤独なレースをする結果となつた。このためややペースダウン。あと1kmの声援を聞いてからは猛然とスパイト。一般の一流選手に伍して堂々十一位の好順位で第2区川口にタスキを渡す。NHKの解説者も高校チームの健闘にはさすがに驚いたらしく今年度新人戦の活躍を引用し、特に初出場常呂チームを絶讃していた。第2区川口の試走タイムは31'28と決してよくなかつたが、毎日5.10kmのロードワークで鍛えている実績は頼もしく、「頑張ります。まかせて下さい。」と元氣なフアイトを見せて勢いよくスタート。スタート後1kmで大きな上り坂にかかる頃、雷鳴と電光、そして間もなく大粒の雨が次第に激しく落ちはじめた。突風を伴う最悪のコンディション。川口の頭から文字どおり滝のような雨が流れる。川口の身体が左右に大きくゆれていかにも苦しそうである。しかし、ペースは早く水しぶきをあげて孤独なレースによく耐えている。高校チームの後も前もわかない。一般チームの選手が追い抜いていった。川口の力走で予定のタイムより確実に2分以上は縮まつた。にわか雨だつたらしくようやく小降りになつた頃女満別関門が見えてきた。川口猛然とスパイト。タスキをとつて最後の300mは全力疾走。顔を大きくゆがめて関門へ突進タスキを

渡すと同時に路上に倒れこんでしまつた。腹を雨で冷やしたのだろう、何回も路上におう吐した。第三区5.5kmのレースは興味深い。全区間の中では最短距離である。当然各チームはチーム編成上比較的弱い選手をここにあててに違いない。常呂高チームは中距離に強い中股をここに置いた。彼の区間一位はほぼ確実だろう。できれば18分台の記録で離せるだけ他のチームとの距離をあげて欲しい作戦である。ここまでの高校チーム順位は柏陽・常呂・湧別・工業北斗の順。湧別高が意外に近い距離にいるのは驚異、そのあと続いて北斗高、工業高が二百mぐらゐの間隔で追つている。各チームとも健在だ。安全圏とはほど遠い厳しいレースである。選手名簿でみると柏陽チームは第一区と第二区だけが俊足であとは並かそれ以下と思われる。工業高は5.6.7区にキヤリア十分の三年生、しかもうち二人が区間賞をとつたベテランという配置、後半に勝負をかける作戦と思われる。解説者や陸上関係者の予想は一致して北見工業を最有力とし、柏陽がこれとせり合ひどちらかが優勝するものとしている。湧別・常呂の意外なレース展開に他高チームの監督は大いにあわてている様子が監督車の動きに見える。常呂チームとしては何としてもこのオーダーを維持し、柏陽に迫ることが当面のねらいであつた。目標は三位入賞、これが常呂チームの最大の悲願であつた。最終区間まで北見工業チームの追い上げの心配があるのでこの順位は絶対に棄観できないものであつた。各関門に待機している選手にはこのことを先ずしつかり念頭に置かせ

る必要があつた。幸い情況はよく理解されていた。誰一人としてこの緊迫した情勢を理解できなかったものはいない。それ程付き添いの人や役員や応援者の雰囲気がいやが上にも興奮状態にあつたのである。彼等のわがチームに対する批評は一樣に小規模校の活躍というよりはむしろチームがよく編成でき、よく出場できたものだというのが大部分の評価であり、どこまでこの健闘ぶりが続くのだろうかといつた気持ちを読みとれた。第四区佐藤は快走してきた中股からタスキを受け取るといきなりハイペースで飛び出した。彼の目標とするタイムは37'30。一回目のタイムトライアルで41'16とずい分遅いペースだつたのが試走のときは37'30コースが本番と違つているので目標が明確につかめないのが少々心細い。しかし早すぎ、オーバーペース気味、後半ややダウン。しかし、順位はどうやら維持できた。四区でつまると五区の坂道、磯谷がつかなくなつてくる。この区間はぜひとも安定したまま行かせたいものである。ほとんど直線のたんたんとしたコースは心理的に疲れる。佐藤は黙々と美幌市内へ入つた。カーブが多いので前走の柏陽は見えないが確実に迫つていることはまちがいがいがないようである。第五区磯谷も元氣にスタート。はじめの3kmが平坦、やがて吉野台の登坂。この伝統ある網走北見間駅伝では一つのシンクスが生まれたという。すなわち、「峠を制するものはレースを制する」という。各チームともこの第五区の「山場」には最強の精鋭を投入している。どのチームもこの「山場」を勝負の最重要区間として点では一致

しているわけである。わが常呂高チームは磯谷を配置した。彼の試走タイムは決してよいとはいえないが、彼は何しろ「根性の男」である。ここを何とか最少の損失でくいとめて欲しいものである。湧別高が常呂高のあとを着々とつめてきているのがあなどれない。一般チームはこの区間さすがに強くつきつきと高校チームを追い抜いていく。磯谷はそれだけでも心理的に圧迫される。大学の駅伝チームでは登り坂専門の選手や下り坂専門の選手をそのために特訓してしたてることもあるという。おそらくこの大会でもそのような選手もいることであろう。常呂チームとしても磯谷以外の適材はいない。下りから平地にかかるころ体重のかるヒザが痛みだしたらしく足をひきずつていのがわかる。湧別高は三百m後方、常呂高をしっかりとつかまえている。全体では結局24位で第六区の郷内につなぐ。郷内は大分前からたつた一人で今か今かと出番を待つていた。一時間以上もアツプした身体を冷やさないようにジャーシを着たり、ぬいだり。その待つ間は心臓が痛くなるほど緊張したという。リラックスできればよいのだがもう雰囲気はさうはさせない。いらいらして待つてい。ジャーシをまた着た時、右手を大きく振りまわすように磯谷が国道から入つてきた。郷内はタスキを受けると国道への坂道をおつという間に登つていった。郷内の走り方は決してスマートとはいえない。小さなストライドでベタ足気味、ちようど競歩の選手のような走りぶりである。けれども、なかなか早いピッチで走つてい。湧別は確実に郷内をマークし追

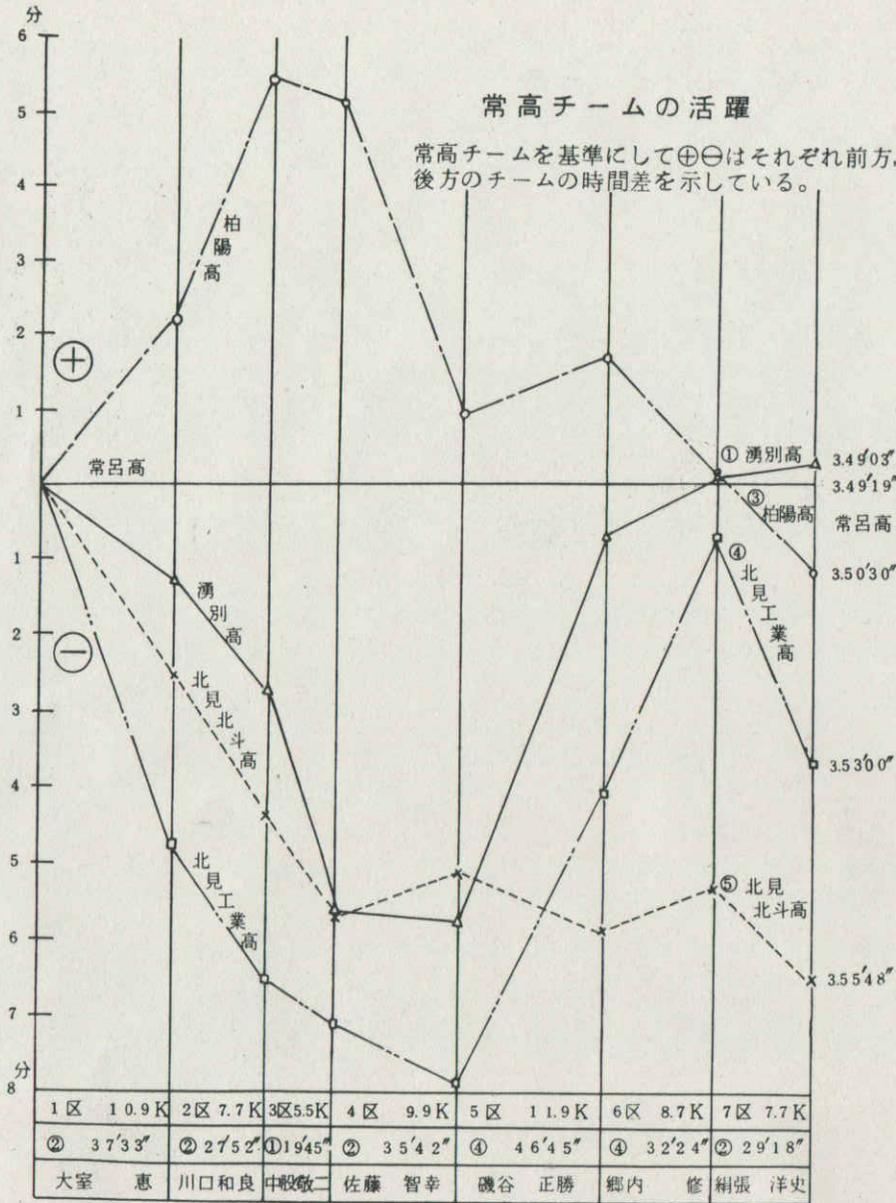
いこんでる。追い越されるのも時間の問題のようである。軽いよくのびる足で湧別が迫る。柏陽は二百m前方、柏陽に追いつくより後方から追いつかれる方が早いだろう。状況はいよいよ最終盤レースにかけてデッドヒート、順位は混沌としてきた。第三位以上の上位の可能性が出てきた反面、四位へ落ちることもありうる。柏陽の足が目立つて落ちていることもあつて、湧別とせりあつて行くも優勝の望みも出てくるかもしれない。しかし、工業が三百mに迫っている。

第七区引継点端野ではついに二m程湧別に抜かれ常呂は第三位、第七区絹張はいよいよ責任重く緊張の面持ち、冗談も今は出ず、闘志に顔がひきつっている。スタートからいきなり湧別を追い始めた。逃げ切ろうとする湧別、柏陽。柏陽はあきらかにオーバペースで口をあけていかにも苦しそうである。わが絹張の出足は好調、一km地点で早くも湧別と肩を並べてしまう。柏陽との差五十mにつまる。柏陽のペースからみて二人で競り合つていけば優勝の可能性さえ十分となつてきた。後方はやや距離がある。高校チーム上位3チームの激烈な争いが一段と激しさを増してきた。工業が必死にピツチをあげている。あと4kmくらいどう迫るか、あるいは間に合うか。それより湧別にせりかかってくるか問題である。従来の常呂高各部の試合で弱いところはこういう状態のときのやりとりである。弱気がついて出て長くつらい、持続するギリギリの勝負ではどうしても負けてしまうことが多い。ここは何としても絹張の健脚に期待したいと

ころ。練習や試走のペースよりは格段に早いペースでレースが進んでいる。北見市街に入ると応援の父兄の声が一段とにぎやかになる。当然地元高校チーム柏陽に圧倒的な声援が集まり柏陽の選手は元気を取りもどす。しかし北見小泉団地をすぎた頃、湧別、常呂が競り合つて柏陽を一気に抜きだした。もう柏陽はついてこれず、ペースが急に落ちてしまった。柏陽を抜いたあと湧別はスパート一気に百m以上も引き離される絹張は北見市内のコースは未知である。不利である。おそらく湧別は試走すみなので負けじとスパートをかける。角を曲がる湧別はもう見えない。NHK前の坂を一気に逃げきろうとしている。まだ間に合うかも知れない。二位確実、優勝の可能性もある。ゴールは近い、優勝をねらえ、湧別高アンカーも早い、もしかしたら勝てるかもしれないという期待の中、わずかに湧別に遅れること16秒たらずの差で絹張ゴール。タイム3時間49分19秒の堂々たる好記録で二位入賞を果たした。常呂高アンカー絹張と湧別高アンカー山田の両君は互いの健闘を称えて固く握手。三位柏陽との差1'11"。工業・北斗ははるか後方。第一区から第七区までが各走者にとつても激しいレースであつた。はげしいせり合いが予想外の好記録を生んだのだろう。そしてこの第二位は彼等にとつて優勝に値するものに違いない。

### 常高チームの活躍

常高チームを基準にして⊕⊖はそれぞれ前方、後方のチームの時間差を示している。



②は区間順位を表す

せない学校、9名の選手すら編成できない学校は多い。大会に参加して恥ずかしくない時間で走り切ることにはなお難しい。何回と優勝した戦績を残しながら参加できない高校さえある。すなわち参加するまでがすでに勝負であるといえる。初出場という経験不足の中で勝つことは至難である。もともと記録からみて四位に入れば十分と思われた。三位入賞ができれば大健闘といえる。そういう判断で臨んだ駅伝であつた。見事という他はない。わずか16という差は優勝の可能性の証拠である。何が彼等をより激烈な勝負に挑ませたか、そして何が彼等自らの力を引き出させたのか、よくよく考えるとこのレースの中に彼等自身が、また常高生の一人ひとりが学ぶべき何かがあつたと思われるのである。この常呂チームのフアイト、戦術、チームワークは湧別高チームの活躍とともに大会関係者は一様に驚嘆し賛辞を惜しまないところであつた。

尚、各選手のタイム次の通りです。

第一区	10・9 Km	大室 恵	37分33秒
第二区	7・7	川口和良	27分52秒
第三区	5・5	中股敬二	19分45秒
第四区	9・9	佐藤智幸	35分45秒
第五区	11・9	磯谷正勝	46分45秒
第六区	8・7	郷内 修	32分24秒
第七区	7・7	絹張洋史	29分18秒
補欠	得川貞二	阿部 勇	

(記録 河村先生)

